

特色のある授業における新聞の活用

兵庫県立香寺高等学校 校長 西 茂樹
教諭 平田 智彦
吉田 しのぶ
谷島 充昭

1. はじめに

兵庫県立香寺高等学校は姫路市の北東部に位置する総合学科高校である。カリキュラムは学習分野ごとに6系列に分かれている。自分の興味関心や進路希望に応じて授業を選択するようになっており、特色のある授業が多い。今回は商業科の「電子商取引」、国語科の「国語表現」、新聞を活用した年次全体の基礎学力向上の取組について報告していく。

2. 商業科における実践報告

(1) 実践内容

商業科では、経済時事を知ることが目的として「電子商取引」の授業の一部で新聞の活用を行った。取組に要した授業時数は、全9時間で、その内容は、以下の通りである。

時限	学習活動
第1限	授業の趣旨及び説明
第2限	興味ある時事経済を探し、テーマ設定する。 (資料として日本経済新聞を利用)
第3, 4限	テーマに沿った調べ学習として、インターネット等を利用して、テーマについての内容や経過を調べる。
第5~7限	テーマの経過を見ながら、自分なりに問題点、課題点を見つける。
第8限	調べたテーマをまとめる
第9限	まとめた内容を発表する

取組は6段階に分けて実施した。6月に趣旨と説明を行い、テーマを設定した。次に、各自が調べるテーマに関する事柄について調べる時間を3時間とった。その後は、教室に必要な新聞を常時置くようにし、いつでも経済動向を調べられるように配慮した。生徒たちは、休み時間などに新聞を閲覧する習慣がついた。9月には、経済動向を見つつ、各自のテーマについて、問題点は何か、課題はどこか、を考えさせた。11月に入ると、各自で設定したテーマごとにまとめに入り、その内容を発表した。

留意したことは、商業科の授業であったことから、経済問題、経済動向、その他経済のテーマに関する事柄に限定し、テーマ設定をしやすくしたことである。

(2) 実践の感想

生徒は手間のかかる作業を敬遠していた。しかし、これから社会に出て行く生徒には、働くものとして経済動向や流れを知らなければならないことを伝え、興味関心を求める学習活動をすすめた。生徒により掘り下げ方に

多少の差異はあったが、大半の生徒は、経済問題に興味を持って取り組んだ。

3. 国語科における実践報告

(1) 実践内容

3年次の「国語表現」の授業で新聞の活用を行った。受講している生徒は根拠に基づいて意見を述べるのが苦手であったため、この点を克服するための学習教材として新聞を活用する実践を行った。

① 新聞を使った要約

新聞社のコラムを活用し、「どのような出来事をもとにしたか」「作者の主張」「作者の論拠」を抜き書きするプリントを作成した。このプリントを完成させた後、200字の要約文を書く活動を週1回のペースで実践した。当初は、抜き書き作業もうまくできない生徒が見られたが、ペアワークで音読を行ったことで、音読効果が現れ、適切な個所を抜き出すようになり、要約文を書くことにも慣れていった。

② 記事をもとに意見文を書く

要約ができるようになったことを受けて、今度は根拠に基づいた意見文の書き方を学習することにした。

生徒は要約文を書くことに慣れていたので、ワークシートに「出来事」「主張」「論拠」を書

き出させるようにし、その後に、自分の意見を400字程度で書かせた。

また、教材として使う記事については、授業ごとに担当生徒を決め、記事を選ばせた。提出時には、「記者の視点」に注意する習慣を身につけさせるため、「自分の興味を持った点」「知ってもらいたいこと」の二点を提示させた。

この二つの学習内容を基にして、夏休みの課題として新聞感想文を書かせた。その理由は、要約文の「どのような出来事が起きたのか」を明確に把握する力が身につけているか、記事紹介の際に書いていた「知ってもらいたいこと」を、記者の立場に立って「なぜこの記事を書こうとしたか」と置き換えて考えることができるか、を確認するためであった。

この課題作文の中で、特に記事と自己の体験を重ねて、自分の意見を述べることのできる生徒が多くなっていた。そして、第7回ひょうご新聞感想文コンクールにおいて3名が入賞することができた。



神戸新聞に掲載された生徒の投書

この学習は継続的に行い、1月には興味を持った新聞記事に対する意見文や新聞の活用を通してどのように自分が変わったかを作文し投書させた。4名の生徒が新聞に掲載された。

③ 記事をもとに発表する

鳥獣被害についての記事（日経新聞「体・験・学」7/18・20～22）を使い、調べ学習を行ったうえで意見文を書かせた。

意見文を書いたのちに、16人を4つの班に分け、班ごとに意見文を読み、班内で記事に書かれている問題点が何かを再考し、それに対する解決方法を協議した。その後、各班でポスターを作成し、そのポスターを使ってプレゼンテーションを行った。

意見文の段階で主題を取り違えている生徒もいたが、班内で意見を交換することにより、鳥獣被害に対する問題意識を高め、その解決のためにどうすべきかなど、情報を共有することにより理解を深めることができた。発表にジグソー法を使い、自分の調べたことを他人に説明することで、調べ学習の内容に対する学習者の理解を深めることができた。

（2）実践における課題

このように段階を踏んで「論拠に基づいた意見を述べる」ことの基本が定着した。

1月に行ったアンケートでは、受講した生徒40名の内、「読解力が上がった」と答えた生徒が31名、「文章を書く力が上がった」と答えた生徒が26名、「意見を発表する力が上がった」と答えた生徒が16名現れた。しかし、実践を始めた当初、多くの生徒が、内容を十分に理解できていない記事を選択したために、講義形式で内容の解説を行うことが多かった。

次年度は、身近な問題を、時事問題として捉える確かな視点を養えるような新聞の活用をする必要がある。

4. 年次における取組

（1）取組

2年次は、1年次の1月から「1分間チャレンジ」に取り組んでいる。1分間チャレンジとは、朝日新聞の「天声人語」を1分間集中して記憶し、何文字正確に書けるかを記録するという取組である。2015年4月21日の朝日新聞にこの取組が紹介されており「この取組を1年次から続ければ、本校生に不足している『集中力』や『文章を読む力、書く力』が身につくのでは」と思い、実施を決めた。

「1分間チャレンジ」は、1週間に一度、ホームルームで実施し、提出させた。さらに全文の書き写しを週末課題として取り組ませることにした。

（2）結果

1年次では1分間チャレンジを7回実施した。7回の平均記憶文字数は24字であった。2年

次では13回実施し、平均記憶文字数は27字で、1年間の変化はほとんどなかった。

しかし、個別にみると、この1年間で覚えられる文字数が10字以上増えた生徒が41人おり、そのうち8人は20字以上増加していた。一方で、覚えられる文字数の平均が、1字でも減少した者が72人もおり、10字以上減少した者が7人いた。

取組の趣旨を理解し、自分なりに工夫を重ねた者には成果が出始めている一方で、多くの生徒にとってはただの「作業」となっている現状も浮き彫りとなった。そこで、成果が出始めた者に話を聞き、年次通信で他の生徒に還元することにした。以下にその一部を紹介する。

(3) 年次通信より

① 10字以上増加した生徒の話

Q 最初は10文字以下だったが、最近では60文字前後覚えられている。なぜ覚えられるようになったのか？

A 夏休みに就職希望者の補習で1分間をした時に、自分だけ覚えるのが遅いことに気づき、やり方を変えてみようと思った。以前は、1文字1文字覚えようとしていたが、今は2行くらいにさっと目を通し内容を理解する。その際に文章の内容をイメージするようにし、その後で一文ずつ覚える。覚えるときには助詞の「を」や「が」に注意している。

Q どのような気持ちで取り組んでいるか？

A 「前は3文覚えられたから、今回は4文目の途中まで覚えよう」など、少しずつ限界を伸ばしていこうという気持ちはある。

Q 1分間に取り組む「効果」を感じるか？

A 国語で勉強する評論や小説が読めるようになった。自分の中で区切りを決めて、線を引いてそこまで読む、イメージするという手順で読んでいくと、自然と内容がわかるようになった。

② 1年次から50字程覚えている生徒の話

Q どのように覚えているか？

A 1文ずつ覚える。句読点は「テン」や「マル」という音で覚え、心の中で復唱する。次の文を覚えたら最初の文からつなげて復唱することを繰り返している。

Q 何行目まで覚えられるか？

A 2行目の半分くらい。

Q 時々10文字以下のときがありますね？これはなぜか？

A 難しい漢字が出てきたときに漢字を間違えてしまいます。

5. 今後の課題

本校の生徒は、1年次から発表をする機会が多く、調べ学習の発表やレポートを書くことには積極的に取り組むことができる。そのため、新聞を用いた調べ学習は生徒の実情に合った学習方法であった。しかし、社会時事に対する知識が少ないため、発表内容が表面的な事柄について述べるが多かった。

次年度からは、生徒が自発的に自己の知識量を増やせるように新聞を活用する取組を考え、実践していきたい。